



へ13
1833
2

繪本右図記第二之卷

目録

辰吉郎爲齋尾列需禮

修好者考相辰吉郎

織田家高祖

信長公僧供養

平手政秀諫死

信長與敵後道三會法寺

信長奇謀斬堀田春日雨士

後吉郎見多信長鄉

後吉郎事信長鄉

後吉郎小牧山并樹木

繪本左記卷之二

後吉郎為尾州需糧

大公事を妻い覆水盆み納らべの確み慙い朱實居が妻を
朱實の妻を得て悔て縊る乞婦人等の情なり其の匹ま
匹婦いんと大おまの志をわたり知らん叔も松下之綱の富士
川の合戦み後吉郎は死なれた働きをわたりたれをいよく
争く月いづの之綱元来後吉郎大志ある人なり知まば去て依
家に仕へん事を思ひ同ト家人み川村治右の娘きく女を
つる後吉郎み要せ永く己が家にとらん其後きく生盤
客儀婢婦後吉郎が碗を壊へとも自命りじがう後
夫婦よりたれど背くして樂まる或時加ま清後吉郎とて





真蹟記 初篇二

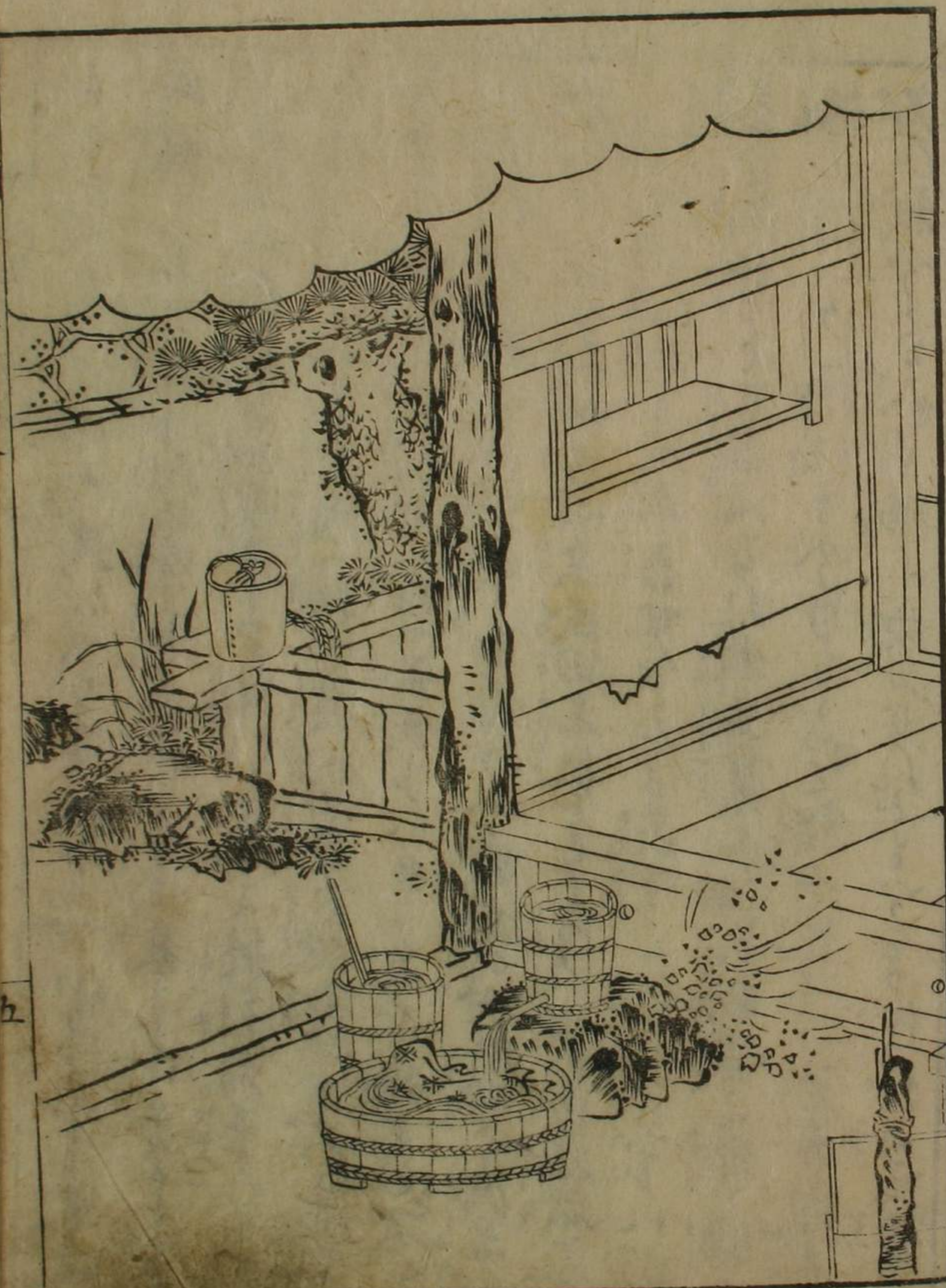
夏長郎
尾長
顔
禮を
需ん
と

今尾忍小田信長が家へ捕例よりうさる朋丸とそ右の服く
合せ伸縮目使はる襪と羽布はしはが古なれは織田家になよ
ま此襪を調へ来りてと着令ふぬをぬき襪の料よりてよ
る者未細令来し退て妻より別を告る此妻よりおくと
し先離別せんと希ふ者も其河より離縁の二紙と
渡り尚別との語とて先年秋葉権現の神より拾ひ得
三面の大黒天をよみし妻よりくく抑此る像は弘
法大師の御作とてを信仰せし者いふ三人の司とぬ
や佛の汝信知しと後の事を知らしと云ふし妻お笑ひ
さける靈驗ありと云ふる像は和主信心して立身をも移し
まふ、女の方へ手はしと云ふ者やぐく大黒天をよみたり

と我事いうれ小きゆぬありはを不持して更ぬ用はしと傍
なり石よりお付し不思議なるる此る像一塊の所とわけ
おく微塵より飛散り此人天下と掌握とくき祥瑞なり
と後にそおひ合せり

修好者考相後若郎

漢の高祖三尺の収を捉芒碭山より白蛇を斬て漢家に百
の基業を起し終りし其始めは泗上の亭の長よりしより奥
より若き時迄と好む業にとさる人おしとくを蹴む中
單又の呂文一人肺公を相して甚どるも其女呂姫とよへて
肺公も娶と後此女を呂后と称し呂文と呂太公と号は依て
るよ天智天皇より乞食の相よりく明雲座より鉄死の相



夏吉郎
 大黒天
 の像
 碑

一もあつたき不謂あはるる即松下が下知よりく尾張
 國へ移りてとて之利の擧の茶店にて暫く休息しけり
 との張人老若男女あつて其體の申へ終終者人々
 をたぐぐとあつて債へ招き其相親を執事と大に
 きやうは其下の相親の妙之必天下に主する人
 目前に現るる妙しき匹ま下即なり今我國の時
 倉今川氏の本意は小糸武田と板とを以て諸國
 の勇將威を震い檀越の天下を平すべしと
 其相親こそ不思議なれ我年来和漢の相書
 修し得たりし相法も今日もめて疑を記せり
 我今こそかく妙しき事なれども其の傍俸
 多し我今こそかく妙しき事なれども其の傍俸

ときどきりにもあはるる今この河後
 一もあつたき不謂あはるる即松下が下知よりく尾張
 國へ移りてとて之利の擧の茶店にて暫く休息しけり
 との張人老若男女あつて其體の申へ終終者人々
 をたぐぐとあつて債へ招き其相親を執事と大に
 きやうは其下の相親の妙之必天下に主する人
 目前に現るる妙しき匹ま下即なり今我國の時
 倉今川氏の本意は小糸武田と板とを以て諸國
 の勇將威を震い檀越の天下を平すべしと
 其相親こそ不思議なれ我年来和漢の相書
 修し得たりし相法も今日もめて疑を記せり
 我今こそかく妙しき事なれども其の傍俸

信長高祖

去後み者即ち古卿中村はゆり父母一族を集め松下より
 糧の料とて終り美令と別とへ我松下はつとふも小器の
 之綱我出方の便り要し又古主織田信長仁勇の文おられ
 織田ははるる遠きを伸べしとて其財を足合せたり抑尾
 及清原の城主織田上総女信長卿の家系は見るふ板武天
 里の末裔なりて平相國清原の嫡孫三位中お平次貞盛十九



後
乃
者
考
相
と

代の後流尾忍の太守斯波武備家の臣下なりしが去る義仁乃
元より斯波家大い裏へ信長の父信秀の時より斯波の
一家滅せし終に尾忍一國悉く小田に属しぬ時天文三年
の頃小田信秀一男とせし童名を吉法師と号し生得聰
明廉利なりて信秀の寵愛大方なりて天文十三年十三歳
して元服し小田三郎信長と呼び十六年信長十に歳なりて
二子餘騎を率し今川義元と討んと参りし出馬し吉良大溪
の辺とお働く是信長卿の神陣なり御乳母平中務政秀
士率し下知して去るなりと放火せし敵出く戦ひ力戦して
信長卿のるるに侍人と陣を構へて敵所討ちし三河勢
一人も出く戦ひぬるなりと押ひし中務信長を進めて陣とせし

本城へゆきし信長此時十に歳なりし細辛とて入るも其
の器ゆり給ひし平中軍配と見ゆし此に陳とてあ
二子餘騎を七々に別ち侍人と立て扱くる参河勢の敵とせし
放火し妨とせしと敵とせしなりて敵の退くべきなり
埋伏して其不意に侍人とせし信長勢時陣をぬき歸
るしこれ並ての斗兼お遠しとて今宵夜討せしとて
其勢一子又百人子の刻する信長の陣に押寄國を他て切入り
信長勢通く期しとて参りしお國の旗炮を鳴すと答へし
七子の軍兵二子余人参河勢を中に追ひ包んで戦ふなり
今川方棄に遠しとてしとて討ちし者殺をりしに爾
八方へ逃散なり信長急し命を傳へしとて今こそ引退しとせし

のぶとぎのせんぞ
信長高祖



疾の明る程は陳拂ひて名古原の地へ入り給ふに合戦の次
分悉く國は何より進退掛引天晴大將軍の器量ゆき給ふ
を見て平中務とをとりつゝの軍士兵卒にむかひて
来たのりくほびる給ふ天文十八年三月三日小田原
後守信秀率去りて信長家督お續し給ひるが信秀
病床より給ふにゆいより信長卿何となく物狂ひしを
弁んよりまじ衣履より髪のおもひまで異相を好まなう
馬より乗るんと食ひつゝ往來し侍者五人の好流の
まよりこれに家中の人々安んじ思ひかくて小田原も
威をぬべしとくさましく諫言とくても信長より
給ひよく我を慕はれ給ふ者なりとあり

信長千僧供養

或時信長領地の方の出に二國を居守りの役人を數
使往來の僧法師と悉く捕へむけり又例の地ねひなりを
平中務討ち殺し盡す疾疫なく誅えしこれに信長甚だ
迷惑し席と避く平中にて對面せ給ふ下知成り僧
法師と捕へる程は既三百人餘り給ふ彼往來の僧共
いふるありてかく大勢の僧と捕へるなりと給ふ
まじとく語り罵るも誰も信長卿の怒えと知りた
る者もなく狂人は花の國主なりと定めて罪なき我を
殺し慰めぬ給ふなりとて夢をあげて泣きあり年
老る僧もいふ世の報いさきの因果佛の教守此時と

信長
の
供僧



貞顯言不篇二

經を讀み佛名を唱へ強しきや斗はし時二月下旬信
秀卿の七日はあり万松寺にて追福の法を執りて
彼捕へたる僧法師を不赦よしとて万松寺へ傳ひ信長
僧衆と對面し今日之は中陰の儀とあり當りたる僧供
養をなさんため毎日より飯をとり給へし宗廟くみ給ひ
し讀經供養たのめ入しし叮嚀をそし告給へ救ふ乃
僧ども始て心を保んど收む勇よりしし經共と讀
し佛の作善するよりしは又も事の秘を調へ僧法師と供
養し若干の金とよへ布施し母のく暇を給ふるは
いふる浮目よりしとんと歎き悲しし衆僧も籠中れ
の雲よりけり心持し母のがたまぐり給ふる中れ諸

士も棄に遠し信長の死に危し角にも其風を好
給ふ長久の計しにありし人眉をひそめ給

平政秀諫死

叔も信長卿の死にふししとてふより平政中務政秀
屢諫言を勸むれども曾て其の死に平政退く思惟し
我信長卿の御乳母とて初めよりまこと時より其の
傍とて守りてせしむるかく異風と好む給ひぬ
探せ給ひてし新めお智とせ給ひ若何しと國を
保つ給ひんや況今に方悉く敵國よりよき遠を伺ひ
棄んとし斗秋に自他お滅と及び國陷の時よき何の
面目ありて死して先君を偈しなれ給ふ死を以て沐



平手
政秀
練死

貞显言初卷二

十一

なすべからずも御用ひの事もあらずと云々定め一紙に諫
書と教条の利害を演記し奥男賈物と遠征し死後
信長卿へ呈せし軍学陣法六韜三略の要旨も悉く
賈物と偽人終み後撥切て死し其賈物の後をうかの諫
書をおして信長卿と接げ後うかの決意と云々としバ
信長大に怒れ其送書公開きんて事を教して懲と
歎ともしも我智恵の中勢も我本心我知るべしと諫死と
遂うこそとくも妙案なり我新又と云ひ今我國
の中は勝弱ありてい國と保ひし能はざるゆゑは後若
人の幼少をぬく鄰國の強敵を物の教とせざるは我
流に斗筭之徒來の僧と捕へ我皇兄と彼等と云々

金銭と云々去しし信長こそ活きの若者思ふ者のおまけ
と諸國(風俗と云々)を我を拒なりと思ひ何れ来る者
あつて微塵ふかして勇を示し終み天下に後援せん我本
心を教ふることを懲りしれと諫云々西に押出て云々
と後援の賈物の低取を云々若御若年と云々ゆと云々
天性自來の英才と云々てか我斗筭の者おも知れに能
うまき諫云々とくも思ひ何れと云々信長卿諸君と
許と云々何程か嬉しく思ひ何れと云々信長卿諸君と
紅派教則と云々信長卿と云々海今細て我幸心と云々
と云々望く他は諸君に我之と云々此の事と云々取ね
いもあつたに於て幼少をぬく堅固と國政と執事と云々

時中勢が疎死より信長が正体はぬせり中勢忠
死をうけしとみ難と君令は監物とうの云葉もなく只
いふに信長郷の智仁九急の及ぶたれにありと
密よりうけいよく忠志をきげとる

小田信長と母屋道三會放正法寺

天文十八年三月信長は信秀未成の事なりしが信長
國母屋山城入る道三女をみて信長が室に就き其
三月信秀年去ありて子息信長が智お續せりと其
信長はしりしに願人なりしとて男道三信長は對面
器量なれり柔弱のおなりせば聲をあげて盡くされ
て尾及切るる一と信者として信長を拒き信長は國母
法寺にありし時見せしむるや送り諸事の應對

は寺にありし時見せしむるや送り諸事の應對
みれ信長をみる信長は其の心しき國風をきりし
と其用をきりしと去後小田方に家老林去守柴田勝
家等信長は別は親と給ふる其思はたれや此事い
て辭退みべしと信長曾て用ひ給ふ日又月廿
六日正法寺へこそ親と給ふ既は國母の庄の西にあり給ふ
其の別出まの畧事ある其思の人民肝を盡し天晴勇
義親物哉と神はつね膝をすくへんおとけり道三入る
達し其信長はつねる出まて来りんとをおおる石は
民家の内より傾ひたる信長郷の別列こそめさるる
炮三百挺左右に列し次は三間柄の赤槍三百挺是れは左右



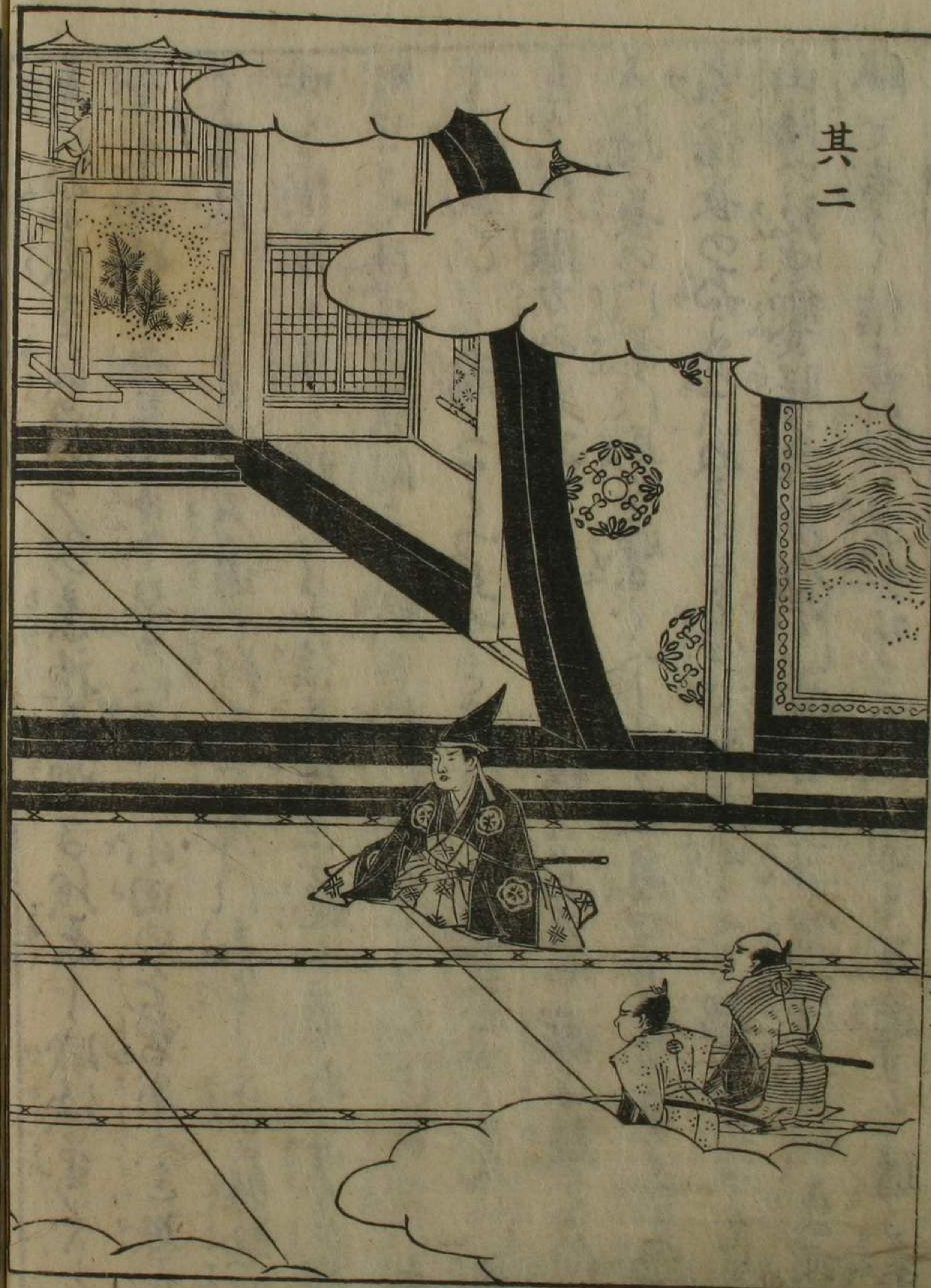
信長
道三
會
山法寺



真言初篇二

侍人其後より歩弓の者百余人悉く赤きお表束衣を以て馬を
さし渡り信長御の出立より急坂の深き所へ凡の太鼓のかしら
は虎の皮の中袴を以てつけ鬘斗付のち刀服を着て素縄を以て
世継の草を以て挽ぬと付け衣帽子を着せは萌黄の平打
りそ袴と巻立腰のめづりに大お袋馬を指馴らすとの指と
多く結ひ付栗毛なる荒狗を白濁をませて上下の月替一々
余人次第を守ておせたる通三を始めを智の人へく奥成と
楓松しき出さると思ひにどんと多ひる信長吃と見詰り我
姿と見んとなつて我衣へおく人へく一衣れ寛くを以たりと
大音は呼りておる成る三はて大に驚きといひてふられ悲
ひく先へ降りたり楓も信長は心法寺よりより休息の間に入りて

幸にお表束衣を改めからんの素袍馬帽子を以て威儀重くと
座より着移り急坂を下りて及べと小田のを留め人々を怒と
く平伏しつゝ入る道三はて共席に立出くは又懇懇町
崎と源次と因と結ひたりが信長道三が面を屢お守り
町よりそ隣子の遠間より我を伺ひ多ひするは曲者には
も知れぬいづる者なりとつと中より知れぬは道三心中より思
はくは眼力も大おいそり人の下位はまんなや我子孫も終
いに信長の門下馬を繋ぐべしと歎息せらるるが故後一
家信長のおよそいぬること三が先見ぬりと謂つてさても
山海の琉球饗膳英若所居其日の宴會終りたればは
臆と告ぐ信長は退き出るる三は道三も途まで送り来



らせろが途中の約束を破れど、事あるき、母家乃
約束を破る、右をちり目まざる、事一とせ、うなまは
何となく威を棄れ、とがしくこそ、人よりさし、英濃
一國の軍民、信長の活道の勇、おろと、密に感、とい、う

信長、新堀、春日、雨土

信長通三、女と、要所、結ぶ、と、も、終、い、英濃、國を、斬、る、き
不、ね、ろ、ろ、信長一、計、と、せ、一、毎、夜、通三、女、活、道、が、熟、睡、と、伺
い、を、て、ふ、就、て、お、に、出、候、と、て、ゆ、ろ、ろ、一、月、余、り、濃、姫、を、候、と
て、君、お、び、く、心、と、通、り、給、ふ、者、あ、る、露、て、石、せ、給、ふ、妻、柳、も
妬、い、心、持、つ、何、を、を、塞、り、て、深、く、包、ま、せ、給、ふ、と、恨、と
候、な、る、と、信長、い、て、ろ、ろ、の、情、ろ、ん、我、一、の、秘、斗、あ、り、て

人、お、信、長、と、ろ、ろ、の、情、ろ、ん、疑、つ、ろ、も、理、ろ、と、て、又、花、の、如、く、と、ろ
ろ、一、月、斗、濃、姫、い、ろ、心、を、若、く、せ、給、ふ、と、心、を、一、系
せ、ん、と、い、通、て、い、思、ひ、ろ、ろ、と、ろ、ろ、女、心、の、愚、と、い、御、志、の、辱、ろ、ろ
ん、方、と、い、是、に、居、ろ、と、給、へ、い、妻、い、何、地、も、出、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、候、を
流、ろ、ろ、ろ、ろ、信長、冷、方、な、き、神、ろ、ろ、と、て、は、は、又、道、三、入、る
我、ろ、ろ、ろ、ろ、一、旦、和、國、な、ろ、ろ、と、御、志、を、し、ろ、ろ、と、せ、給、ふ、と、ろ
ろ、我、本、心、は、あ、ろ、ろ、と、今、英、濃、の、家、老、堀、田、道、三、を、日、丹、後、乃、あ
ろ、ろ、密、に、我、と、い、合、せ、道、三、を、殺、害、ろ、ろ、と、疾、子、母、の、刻、限、み、央、を
揚、ろ、ろ、お、國、と、い、と、固、く、給、ふ、ろ、ろ、と、け、け、又、十、余、日、同、毎、夜
星、と、い、て、霜、を、踏、で、を、を、争、め、ろ、ろ、と、未、央、の、お、國、と、い、な、き、い
今、に、其、便、ろ、を、得、ろ、ろ、者、な、る、ろ、ろ、と、今、宵、に、も、お、國、乃、央、を



真景言不存二

揚るゝ軍兵を率ゝ濃姫（乳入り）母一家討之
と云々穴賢に云々物語を云々濃姫は守衛の兵士
を付道三方の文通を云々濃姫は信長の物語を
まゝと思ひ日夜心を若く守る守兵信長の内意を
受て態と云々に或る暇又の席を云々お出で其
緩弛云々濃姫は云々と云々委細を云々の所へ
告ぐに道三大に終き怒り終は濃姫は目のお人と判
と信長がす謀なりかお智謀のおおるに及る即志と
小田よか云々おを見合せ云々

後若郎見参信長卿

永禄元年九月朔日小田と総次信長卿小牧とに将

後若郎お云々と云々本陣の陣羽織を云々一両刀と常い將
場は推系一太おの見参に入ぐと云々小田家の功高
権六郎勝家怒て曰我君は云々云々云々云々所
敵國の同者云々捕て拷問せよと云々云々云々
云々後若郎も怒り某曾て云々云々云々云々
と云々敵國の同者云々小田の某一人大勢出合云々
云々及て敵の同者を見定め終るま付て中云々謀
し云々思ふ云々云々云々信長遠くは
を云々後若郎を云々其妻は云々云々云々謹で
云々君今日の御將又教多の席後と得終るも天下國
家の云々云々我一人を得終る云々忽天下と云々



真景言初卷二

九



長太郎
信長卿
且見参

真景言初卷二

九

臣民万衆をうゝふに此の事をやさんふ推挙つていふうと
 中々信長卿希ふの事には同て宣ふは武乃ふ
 わて何ゆを心得るや此の時最をあげは某といふ
 人を頼り下り地理に通し其中は母いて悉く知ることふ
 うたう希ふことふ事には實に此世の孔明活世の周公を抱て
 其能を試み給ふと信長卿驚れ給ひ先天下とあて其
 実を承ふとんと是時既成其の心をて最を承け給ひ
 於て本城へ入り給ふに最又ふとふといふ尾門は橋の所
 人なりしか家藏業一代小田家の用金成調達し時乃用ひ
 新しき懸仁の礼より盜賊をうりに細細し金銀と給
 市中の恒而ありては清溪の城中に居て後信長卿の

時より是時既を信付られ堅固な勅後しうろろふとふ
 女を以て最を嫁せむとふ後の章と見てふるべし

最吉即仕信長卿

其時最吉又ふといふ信長卿の信成なり最吉即とをて振き
 其生國姓名義は御前にてやとふり天文地理兵學の事を
 尋ふふ最吉即答てやうに某が父の中村弥助昌吉とて
 先君後後守殿は仕へ是時を勅め戦場を膝に付村ら
 仕を止めて當國中村は後し百姓とある某別弥助昌吉
 が中村最吉即と名者て侍ふ勿論先の中とふる天を
 堪理かんといふう曾て以て一向ね石中只當家にな公仕
 度事といふも石中の某一變うて石抱りあまふとに



後名郎
 信長卿
 又佐人

真蹟記初編二

九

又但ぞく何れを中てひいこそ御目より止り美原の御給ふも
形り拙者も本意何れも是より先んや何れを希くは御言
を以て中間なるてもはり忠勤と尽しなり度より打歌
こゝろ軟いられは後身も案にお遠くして此言言よ及たれ
を信長より先いせ給ひ不敵のうらまひ云語るひやうき
なり海が紐下とぬ中間より抱へて出る御馬飼ひは
せ付られ小様くとりしあり

後右郎小牧山義樹本

根も後右郎御馬飼とぬり美原馬草飼料の配申ひやう
其暇には一向も成て馬の惣才を振られは暫の間は其毛を
黄く輝くく信長御の御目よこまり美原を修付

られくろふ美原の時にも御美原を己が懐に入し温る方
石より叶ひあり信長御いもど壮年よりく御美原を
大おならはぬ殿を振暑とぬり美原の御馬飼の御
より馬を美原ひやうある朝雪最久隠棲く美原を
いきに常よりあり記給ひ云関より人後も希なりは誰
ありられくろふ後右郎とて侍ふと信長後右郎に同く美
いふてく汝の外より人となりて後右郎謹でさんい今給ひ
目より君の御出ず御斗あり侍ふ親より来一人も美原に
と信長又同て汝一人何れとて又く美原よりや後右郎
下郎より今給ひはありは毎給ひ人より一時で又く美原
御出をを侍ひと市に美原より侍ひ信長御後右郎が御美原



真田記初篇二

九

後
小
の
樹
を
第
三



真田記初篇二

九

誠なる所感へ終へて争く圓い終へて其基を其の役は
出され諸々の費と省き候へるまゝをて其所の物入ふきやう
に名きまうたれは姑めて三十貫の持持所下へ場やとるゝある所
小牧山所將の時山中の樹木を敷へてせ給ひつゝふまゝのなるれ
を混雜して敷へて人ぐ其圓くある所を即ちまゝとて
細き繩を三斗斗は切て木の根は終り付懸繩敷何種と定め
てと終りし繩と敷へていへ一本もお遠なうて易く敷へ終る
そ又後右郎が所みえての才智と人ぐ感どつゝと

繪本太閤記卷之三終



